HOKKAIDO UNIVERSITY

| | |
|---|---|
| Title | ロシアに渡ったアイヌ資料の歴史的経緯について ： A.V.グリゴーリエフのアイヌコレクションを追跡する |
| Author(s) | 鈴木, 建治 |
| Citation | 北方人文研究, 5, 1-12 |
| Issue Date | 2012-03-31 |
| Doc URL | https://hdl.handle.net/2115/49266 |
| Type | departmental bulletin paper |
| File Information | 01journal05-suzuki.pdf |

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

# ロシアに渡ったアイヌ資料の歴史的経緯について
## ―A.V.グリゴーリエフのアイヌコレクションを追跡する―

鈴木建治
北海道大学アイヌ・先住民研究センター　博士研究員

### 1　はじめに

海外に渡ったアイヌ資料に関する本格的な調査は、1980 年代後半から始められ、西ヨーロッパ・アメリカ・オーストラリア・ロシアの博物館や美術館などの研究機関において存在することが明らかにされた（小谷・荻原編 2004）。

ロシアにあるアイヌ資料調査に関しては、1995 年から 2002 年の 7 年間実施された。その研究成果として、ロシア国内最大のコレクションであるサンクト・ペテルブルグの「ロシア科学アカデミー人類学民族博物館（通称：クンストカーメラ）」と「ロシア民族博物館」に収蔵されている民族学資料のほぼ全てがカタログ化された（SPb-アイヌプロジェクト調査団 1997、荻原他編 2007）。

ロシアのアイヌ資料は基本的に樺太で収集された資料で構成されており、北海道で収集された資料はその半分にも満たない。北海道でのアイヌ調査と資料収集を実施した研究者は、A.V.グリゴーリエフ、B.ピウスツキ、V.N.ヴァシーリエフが知られている。1903 年のピウスツキによる調査や 1912 年のヴァシーリエフによる調査報告に関しては、日本やロシアでもその詳細は広く知られている（荻原眞子 1998、Горбачева и Карапетова 2007 など）。しかし、彼らの調査よりも遡る 1879～1880 年のグリゴーリエフによる調査・資料収集の詳細については、日本は無論のことロシアでさえも明らかにされていない。グリゴーリエフについての人物紹介は、『ロシア科学アカデミー人類学民族学博物館所蔵アイヌ資料目録』の中で簡単に触れられているが（Таксами 1998b:131）、彼の調査・資料収集の内容についての詳細は記されていない。

本稿の目的は、1879 年から 1880 年までの約 1 年間の日本滞在で、A.V.グリゴーリエフによって収集されたアイヌコレクションの内容とその知られざる歴史的経緯の一端を明らかにすることである。まずは、なぜグリゴーリエフが日本に滞在することになりアイヌ調査・資料収集に従事することになったのかについて検討する。そして、グリゴーリエフが日本滞在時に集めてロシアに持ち帰ったアイヌ関連の各種資料を集成し、どのような歴史的経緯により収集されたのかを整理する。最後に、なぜグリゴーリエフはアイヌ調査・資料収集を始めることにしたのかについて考えてみたい。

### 2　ノルデンシェルド号の座礁とグリゴーリエフの日本滞在

#### （1）日本滞在以前のグリゴーリエフの略歴

グリゴーリエフ・アレクサンドル・ヴァシリエヴィッチ（Григорьев Александр Васильевич）は、1848 年にサンクト・ペテルブルグで生まれた。1870 年、彼が 22 歳の時、サンクト・ペテルブルグ大学物理数学部において植物学により学士号を取得し、1871 年からサンクト・ペテブルグ応用技術研究所で植物学と生理学を教え始めた。1872 年には植物学の修士号の試験を合格したが、論文は提出しなかった。その頃、彼の興味は既に別の研究分野へと移っていた。1876 年の夏、グリゴーリエフは白海や北極海へ航海し、海水の温度や密度の計測等の水文学・気象学に関する調査を実施している。また、1878 年の夏には、ドニエプル川沿いを探索し民族学・考古学資料を収集し、更にウラジーミル州・ムローム市近郊でクルガン（墳墓）

の発掘調査もおこなった（Ольденбург 1909:70-74）。

グリゴーリエフの研究経歴を見る限り、博物学的・人類学的興味を持ち、幅広く研究テーマを設定していた人物であったことがうかがえる。そして、グリゴーリエフが 31 歳になった 1879 年に、偶然にも北海道でのアイヌ調査・資料収集の機会を得ることになるであろう航海に参加するのであった。

### （2）ヴェガ号の救出とノルデンシェルド号の出航

19 世紀後半のロシアでは、スカンジナビア・イギリス・ドイツなどの各港とシベリアの各都市を直接結ぶことを目的とした極北圏海路の開発ための探検調査が果敢におこなわれていた。ロシアの商人であるセミョウーノフ家・シビリャコーフ家・トラペーズニコフ家は、極北圏探検調査に対し資金を援助していた。しかし当然のごとく、極北の水域には多くの危険が潜んでおりその事業には多くの困難が伴っていた（Дударец 2006:88）。

1877 年、フィンランド出身のスウェーデンの地質学・地理学者 A.E.ノルデンシェルド男爵による北東航路開拓の航海探検が準備された。探検調査の資金は、ロシアの実業家でロシア帝国地質学協会の準会員でもある A.M.シビリャコーフ、スウェーデン国王オスカルⅡ世、スウェーデンの実業家 O.ディクソンの 3 人で分担された。1878 年 7 月 21 日、ノルデンシェルドを乗せたヴェガ号はノルウェー・トロムソから出航した。しかし、ヴェガ号は、同年 8 月 27 日、レナ川の出水地域に来たところで、ユーラシア大陸の最北端付近の氷により阻まれてしまった。心配したシビリャコーフは、ノルディンシェリドたちを救出するため、スカンジナビアで新たに「ノルデンシェルド号」を準備し救出へ向かわせた。ノルデンシェルド号は、ヴェガ号で越冬する者たちへ必要物資を届けるため、南回りのスエズ運河経由により北極海へ行く必要があった（ノルデンシェルド 1988a、Дударец 2006:88-89）。

シビリャコーフはロシア帝国地理学協会にこの計画を伝えて、自然科学分野に関する専門家をノルデンシェルド号の航海へ参加してくれるように打診した。シビリャコーフは準備金として協会側に計 3000 ルーブルを提供した。地理学協会の協議会はシビリャコーフの提案を喜んで受けて、白海や北極海での水文学・気象学的観察の経験を有するアカデミー正会員のグリゴーリエフを探検調査の派遣要員として選出した（Семенов 1896:689）。

1879 年 5 月 1 日、ノルデンシェルド号はスウェーデン・マルメを出航した。航海時、グリゴーリエフは海洋の深度毎の水温と塩度の正確な記録を実施した。この作業は、同じくシビリャコーフの資金によってベルリン地理学協会から派遣された天文学者の A.ダンケルマン男爵（後のベルリン地理学協会書記）と交代でおこなっていた。同年 6 月 26 日にスエズ運河を通過し、7 月 4 日にシンガポール、そして 7 月 15 日（日本では 7 月 27 日：以下グリゴリウス暦で表記）、横浜に到着した（Семенов 1896:689）。

### （3）北海道でのノルデンシェルド号の座礁

ノルデンシェルド号が航海を続けているその一方で、ノルデンシェルドのヴェガ号は、氷に阻まれてから 294 日間の越冬を無事に終え、ベーリング海峡を抜けて日本へ向かって進んでいた。この知らせを聞いたグリゴーリエフの探検隊は、ヴェガ号の救出という当初の目的を変更し、8 月 1 日、北極海への海洋調査のためベーリング海峡へ向かって北上した。しかし、8 月 5 日、船は濃い霧と誤った航路により、当時の北海道・釧路国花咲郡落石村の天狗岩に乗り上げ難破してしまった。幸いにも、乗員を無事救助することができ、また船内の備品関係の一部も被害から逃れることができた。船長 H.センダスタッケと調理人の 2 名を根室に残して（城田・本田・猪熊 2007:33）[1)]、グリゴーリエフと他の船員の 15 名は 8 月 22 日に

函館に到着し地蔵町の宿「鳥潟」に宿泊した（函館新聞社 1879a）。ノルデンシェルド号に同乗していたベルリン地理学協会のダンケルマンは、函館を離れ 9 月 7 日には横浜に戻っており、9 月 8 日付の英字紙「The Japan Gazette」にノルデンシェルド号座礁を伝えている（ノルデンシェルド 1988b:448-449）。また、「函館図書館所蔵ロシア関係古文書：露語及び日本語対照版」目録を見てみると、「ブレーメン地理学協会派遣員男爵アレクサンドル フォン ダプヘリマン海軍大尉私用のため三菱会社の汽船で横浜へ出発のこと。」という 9 月 10 日付の「ア・グリゴーリエフからの通知書」（整理番号 12）が確認され（函館日ロ交流史研究会編 1998:25）、横浜へ向かったことが記されている。

9 月 2 日、ノルデンシェルドを乗せたヴェガ号がその偉大なる航海を経て無事横浜へ寄港した。ノルデンシェルドたちは、その栄誉を祝し歓待を受けている。9 月 15 日、東京にて東京地学協会、日本・アジア協会、ドイツ・アジア協会の共催による盛大な祝賀会が催された（ノルデンシェルド 1988b:299-302）。ベルリン地理学協会に所属しているダンケルマンは、この祝賀会に出席するためにも急きょ横浜へ戻ったのではないかと考えられる。

ちょうどこの時、「魯船ノールデンスクオルド号に乗組たる博士アレキサンドル、グリコーリエフ氏は明日出帆の熊本丸に乗組て赴くよし」という記事が 9 月 11 日付の『函館新聞』に掲載されており（函館新聞社 1879b）、9 月 12 日にグリゴーリエフが函館から出航する予定が伝えられている。行き先については記されていないが、おそらくダンケルマンと同様、横浜へ出航したと考えられる。後年のグリゴーリエフの証言によると、彼はノルデンシェルドと面会しヴェガ号でのヨーロッパ帰還を打診されたが断った、と語っている（Семенов 1896:689）。このことからも、グリゴーリエフはノルデンシェルドと出会っていることは間違いないであろう。しかし、いつどこででであったのかについての情報は今のとこと確認されていないので、確かなことは言えないが、ヴェガ号は 10 月 11 日には横浜を離れていることから推測すると（ノルデンシェルド 1988b:351）、おそらくグリゴーリエフは、「9 月中旬から 10 月中旬までの間」に横浜あるいは東京に滞在しノルデンシェルドと面会したと想定することができよう [2)]。

10 月 18 日付の『函館新聞』 によると、横浜在住のロシア領事ペリカンとグリゴーリエフが長岡照止開拓使三等属と共に函館に到着し、10 月 17 日に函館から小野寺魯一開拓使一等属も伴って矯龍丸に乗り、ノルデンシェルド号が座礁した厚岸へ向かったことが伝えられている（函館新聞社 1879c）。また、『明治十二年露国汽船ノルテンスケヲルト号関係書類　根室支庁駅逓係』所収「横濱在留魯国領事外 4 名難破船所ニ到着ノ件」 [3)] からも、彼らは領事ペリカンを連れて座礁したノルデンシェルド号を視察したことがわかる。そして、この簿書に綴られている 2 つの文書、すわなち「大博士グリーゴーエフ外 4 名矯龍丸ニテ出根方ノ件」 [4)] という 10 月 27 日付の出航願いと、「領事ペリカン外 2 名 31 日矯龍丸便ニテ帰航其他ノ件」 [5)] という 10 月 31 日付の出航願いが出されていることから（城田・本田・猪熊 2007:39）、この時、グリゴーリエフは領事ペリカンと共に根室を出航したようである。なお、11 月 4 日付の『函館新聞』によると、11 月 1 日に、小野寺一等属、ロシア領事ペリカン、船長センダスタッケを乗せた矯龍丸が函館港に到着したことを伝えている（函館新聞社 1879d）。つまり、以上をまとめると、グリゴーリエフはペリカンと長岡と共に横浜から函館に到着し、10 月 17 日に小野寺を伴い直ぐに厚岸に向い、10 月 31 日にペリカン・センダスタッケ・小野寺と共に根室を出て 11 月 1 日に函館へ帰ってきたという経路が理解できよう。

更に簿書 3688・件番号 92 によると、「博士エー・グリコリウ外 3 名全済丸ニテ出根等ノ件」という根室支庁書記官から函館支庁書記官への 11 月 20 日付の出航願いが出されており（城田・本田・猪熊 2007:39）、根室から離れたことがわかる。これは、グリゴーリエフが 11 月 1

日に函館に着きた後、再度直ちに根室に向かったことになる。いつ、どの船で再度根室へ向かったかについての記録は見つけることは出来なかった。11 月 4 日付の『函館新聞』において、座礁したノルデンシェルド号について「満潮の候を待ち近日の中には海面へ引卸す手筈なり」と伝えていることから（函館新聞社 1879d）、グリゴーリエフが船の引き戻し作業と停泊作業のため根室に向かったのではないかと考えられる。後年のグリゴーリエフの証言によれば、船長センダスタッケは船の所有者であるシビリャコーフによって罷免されたため、グリゴーリエフが船の救出に全力を尽くすこととなり、結局、1879 年に船を引き出せことができず、彼は保全のため船を停泊させておく方策を採用した、と語っている（Ольденбург 1909:73）。また、11 月 3 日～11 月 19 日付の 10 件の文書[6]をみると、グリゴーリエフと根室支庁・根室鎮台の間で船の処遇をめぐってのやり取りがうかがえる（城田・本田・猪熊 2007:40-42）。この渡航を最後に、グリゴーリエフは根室を離れ函館に帰ったと考えられる。

北海道の雪解けを待って、翌年 1880 年に船は引き上げられ函館へ入港した後、グリゴーリエフは日本から去っていった（Ольденбург 1909:73）。

### （4）グリゴーリエフによるアイヌ調査

では、グリゴーリエフがいつ北海道でアイヌ文化の調査を行ったのであろうか。そもそも、グリゴーリエフが日本から帰国後に出された日本関連の研究は、「日本における園芸（Садоводство в Японии）」（Григорьев 1892）という短い論文だけであり、その内容は基本的には東京周辺での滞在記である。アイヌ関連の論文は確認されていない。

帰国後のグリゴーリエフの証言から、彼は北方圏の研究の継続をあきらめて研究対象を日本に向けて、特にアイヌ研究に従事したことがわかっている（Семенов 1896:689）。また、アイヌ研究のために「北海道の奥地」へ入ることに成功したと彼は述べており、そして「日本での研究活動を最も邪魔したものは、外国人に対して、許可なしで 30 ヴェルスターより奥へ入ることは禁止されていることであった」[7]とも語っている（Ольденбург 1909:74）。更に後述するように、グリゴーリエフのアイヌコレクションには、「ユーラップ」（現在の八雲町）で調査・収集したアイヌ語集も存在する。

日本側の関連資料を調べてみると、「函館図書館所蔵ロシア関係古文書 : 露語及び日本語対照版」目録の中に、10 月 16 日（ユリウス歴 10 月 4 日）付の「グリゴーリエフより函館県令宛依頼書」（整理番号 19-2）が集録されており、アイヌ見学旅行と狩猟許可について願い出ている。「ユーラップおよび山越内へ数日間アイヌ見学に旅行したいのでヨーロッパの言語を自由に出来る人を同伴させてほしいこと。更に学術目的で函館周辺および国内の狩猟許可書を下付してほしいこと」が記されている（函館日ロ交流史研究会編 1998:25）。しかし、その一方で、同日付の「グリゴーリエフより函館県令宛礼状竝通知書」（整理番号 19）で「当初の鳥類狩猟の計画を断念、更に土俗学的練習をやめ、魚、軟体動物等の蒐集に限ったので、狩猟許可書は不要となったこと」が記されている（函館日ロ交流史研究会 1998:25）。この 2 つの依頼書・通知書を見てみると、当初、アイヌ調査と狩猟（鳥類）を計画していたが、その後、アイヌ調査と狩猟を辞め、軟体動物の収集に計画を変更したということが理解できる。依頼書を提出した時期、つまり 1879 年 10 月中にアイヌ調査は実施しなかったことになる。

グリゴーリエフは、10 月 16 日付で依頼書・通知書を函館支庁に提出しているが、この日はちょうどロシア領事ペリカンを連れ横浜から戻ってきた時でもある。翌日 17 日には、彼は船が座礁した厚岸へ向けて既に出航しており、11 月 1 日まで函館には帰港していない。この後、また直ちにグリゴーリエフは根室へ向かい 11 月末まで函館に戻らなかった。このようなグリゴーリエフの慌ただしさを考慮すると、10 月から 11 月までの間でアイヌ調査旅行でき

るような時間はなかったのではないかと推測される。

グリゴーリエフの証言や彼が作成したアイヌ語集の存在から、彼が実際にユーラップでアイヌ調査を実施したことは間違いないであろう。しかし、それがいつ実行に移されたのかについては、今後の課題である。

## 3　グリゴーリエフが集めたアイヌ資料

グリゴーリエフが日本で収集したアイヌ資料は、①民族学・考古学資料、②文献資料、③言語学資料、④画像資料である。各資料の収蔵場所は、民族学・考古学資料についてはロシア科学アカデミー人類学民族学博物館（以下クンストカーメラと省略）、文献資料についてはロシア科学アカデミー東洋古籍文献研究所、言語学資料についてはロシア地理学協会、画像資料についてはロシア地理学協会とクンストカーメラである。いずれのアイヌ資料も帝政ロシア時代の首都であったサンクト・ペテルブルグの研究機関に収蔵されている。

### （1）民族学・考古学資料

グリゴーリエフがロシアへ持ち帰った民族学資料は、クンストカーメラに収蔵されている。民族学資料の詳細については、SPb-アイヌプロジェクト調査団によって 1998 年に出版された『ロシア科学アカデミー人類学民族学博物館所蔵アイヌ資料目録』で報告されている。SPb-アイヌプロジェクト調査団の報告によれば、グリゴーリエフによるアイヌ関連の民族学資料は、コレクション№.「345」と「811」の 2 つで構成されているおり、資料番号数は前者で 35 点、後者で 28 点の計 63 点である（SPb-アイヌプロジェクト調査団 1997）[8]。コレクションのうち、イタ（盆）、アットウシペラ（織篦）、イカヨプ（矢筒）、キセリトウマム（煙管入れ）の 4 点に関しては、「函館の修道司祭アナトーリから取得」と記載されていた（長谷部 1998:24-25）。グリゴーリエフの民族学資料で構成されているコレクションは、クンストカーメラの中で決して大きいものではないが、19 世紀後半に北海道から収集された資料としてその価値は高い。

グリゴーリエフのコレクションは、1901,1902,1904 年に L.Ya. シュテルンベルグによって台帳化されており、その中にはアイヌ文化のものだけでなく日本文化に帰属するものも記録されている（Дударец 2006:94）。また、ロシア帝国地理学協会がクンストカーメラへ譲った民族学・考古学資料のリストを見てみると（Матвеева 1996）、コレクション№.「345」のアイヌ資料に関しては 1891 年に収蔵という記載を確認することができた。だが、もうひとつのコレクションである№.「811」のアイヌ資料に関しては、理由は定かではないが、このリストには記載されていない [9]。なお、このリストによれば、グリゴーリエフはアイヌ資料の他にいくつかの民族学資料を寄贈している。ムルマンスク州収集の民族学資料（コレクション№.「342」）、ラップランド収集の民族学資料（コレクション№.「881」）、フィンランド収集の民族学資料（コレクション№.「1556」）が彼によって寄贈されている。

また、グリゴーリエフのコレクションの中に 2 つの考古学資料も存在している。ひとつはヨーロッパ・ロシア地域で収集した考古学（石器）資料（コレクション№.「1449」）、もうひとつは日本で収集した「新石器時代」の考古学資料（コレクション№.「1294」）である（Матвеева 1996）[10]。日本の考古学資料の遺物番号数は 131 点であり、これは彼が日本滞在時に収集したコレクションと考えられる。クンストカーメラにある台帳の中のコレクション№.「1294」を見てみると、採集場所は「東京と横浜の間にある大森貝塚」と「函館」と記載されている。大森貝塚の資料は、土器片・石斧・骨（動物骨）で構成されており、63 点である。函館の資料は、石器類・貝殻で構成されており、66 点である。土器片 2 点が収集地不明である。大森

貝塚は、1877 年に E.S.モースや H.v.シーボルトにより日本で初めて学術的な考古学調査が行われた遺跡として知られている（モース 1983、クライナー編 2011 など）。台帳には、「この貝塚については、E.モース教授が『大森貝塚（Shell Mounds of Omori）』（東京大学理学部紀要第 1 巻第 1 部：東京：1879 年：8-IV：全 36 頁・全 18 図版）において記録している」と記載されていた [11]。

### （2）文献資料

グリゴーリエフが日本で集めたと考えられる古文書・古籍等の文献資料は、現在、サンクト・ペテルブルグのロシア科学アカデミー東洋古籍文献研究所に収蔵されている。東洋古籍文献研究所における日本語関連資料をまとめた目録をみてみると、アイヌ・蝦夷地関係の古文書・古籍等の文献資料は 54 点存在した（Петрова, Горегляд 1963, Петрова, Иванова, Горегляд 1964, Горегляд 1971, Горегляд, Ханин 1971）。目録の中で、「1881 年 5 月 15 日付のロシア帝国地理学協会図書館印（コレクション番号 683）」、「1881 年 5 月 15 日付のロシア帝国地理学協会図書館印」、「ロシア帝国地理学協会図書館印」、「ロシア地理学協会図書館印」、「地理学協会図書館印」という記載が確認できた文献資料は 20 点存在した。その中で、「1881 年 5 月 15 日」と印が押されている文献資料で「A.B.グリゴーリエフから」と鉛筆書きされている資料が存在した（資料番号 B-145, C-201）。また、これらの文献資料には「コレクション番号 683」と記載されていた。これらのことから、グレゴーリエフが日本で集めた文献資料は、彼の帰国の 1 年後の「1881 年 5 月 15 日」にロシア帝国地理学協会の図書館へ一括して寄贈され、それが「コレクション番号 683」として管理されていたと考えられる [12]。

更に目録を見てみると、地理学協会図書館印が押されている文献資料のコレクション名は、「ロシア帝国地理学協会コレクション、1906 年」となっていた。コレクション名にわざわざ「地理学協会」の名前を入れ、しかも「1906 年」という年代が記されていることから推察すれば、ロシア帝国地理学協会にあったアイヌ・蝦夷関係の文献資料は、その当時日本語関係の文献資料が集められていたアジア博物館 [13] へと「1906 年」に移されたと考えられる。その後、1930 年にアジア博物館はソヴィエト科学アカデミー東洋学研究所と名称を変え、そして、1950 年には東洋学研究所がモスクワ本部とレニングラード支部に分かれた。日本関連も含めたアジアに関する古文書・古籍等の文献資料は、すべて同研究所のレニングラード支部（2007 年に東洋古籍文献研究所と名称変更する）に保管されることになった。このように、ロシア帝国地理学協会にあったグリゴーリエフのコレクションは、まずアジア博物館へ移され、そして東洋学研究所（東洋古籍文献研究所）へと再度移されたと考えられる。

グリゴーリエフの文献資料の中で、その入手した状況を知ることができる資料が存在する。それは、『東蝦夷彙考』（資料番号 C-201）という資料であり、「1880 年の春、東京で 2 円（＝4 ルーブル）で購入」したことが記録として残っている（Петрова, Горегляд 1963:167）。彼がロシア帰国の際に横浜から立ち寄ったときに手に入れたということが理解できよう。なお、『東蝦夷彙考』に描かれている絵の中の 2 枚がロシア研究者によって紹介されている（Kabanoff 1997）。

東洋古籍文献研究のアイヌ・蝦夷地関係の文献資料の総数は 54 点であり、そのうちグリゴーリエフにより収集された文献資料は 20 点である。約 1 年間の日本滞在で集めたことを考えれば、アイヌ・蝦夷地に関するある程度の知識を有し目的的に収集したと理解することができよう [14]。

### (3) 言語学資料

グリゴーリエフが行ったアイヌ調査については、言語の収集を行ったことがわかっている。1905 年 1 月 29 日に行われた中央アジア・東アジア研究に関するロシア委員会の議事録によると、グリゴーリエフが「ユーラップのアイヌの集落で彼が収集した 360 語のアイヌ語を記載したカード」を委員会に渡したことが知られている（Дударец 2006:92）。このカード集は、グリゴーリエフが所属していたロシア地理学協会の古文書室で、「1879 年に噴火湾沿岸のユーラップ村で収集したアイヌ語の成句と単語が収められている辞書」として、現在収蔵される。この辞書を確認した G.I.ドゥダーエフは、辞書には約 700 の成句・単語があったと指摘している（Дударец 2006:90）。アイヌ語の単語・成句の数に差はあるものの、彼がアイヌ語を収集した事実が確認された。

ロシア地理学協会の古文書室におけるグリゴーリエフのコレクションの中には、彼が集めたアイヌ語辞書の他にも 3 つのアイヌ語辞書が収蔵されている [15]。M.V.ドブロトゥヴォレスキー（M.M. Добротворский）の『アイヌ語 - ロシア語辞書（Айнско-русский словарь)』（1875 年出版)、N.V.ルダノフスキー（H.B. Рудановский）によるアイヌ語辞書、上原熊次郎のアイヌ語辞書である。ルダノフスキーの辞書に関しては、村崎恭子編『サハリンの少数民族』の中に収められている（Латышев 1993)。上原熊次郎の辞書名と内容に関しては不明であるが、『蝦夷方言藻汐草』か『蝦夷語箋』であろう。

グリゴーリエフが自分自身で現地に赴いて収集したアイヌ語辞書を作成した点、また手元にアイヌ語辞書を残し他のアイヌ関連の文献資料を寄贈した点を考慮すると、彼がアイヌ語について強い学問的興味を持っていたことが読み取れる。

### (4) 画像資料

グリゴーリエフが収集した写真資料が、ロシア地理学協会の古文書室に収蔵されている。地理学協会に収蔵されているグリゴーリエフのコレクションによる写真集は 9 冊確認されている。日本関連の写真集が 8 冊あり、その中の 1 冊がアイヌ関連の写真集である。これらの写真集は、グリゴーリエフにより購入されたようである [16]。アイヌ関連の写真集は『蝦夷島のアイヌの様相（Типы айнов острова Эзо)』という名で、北海道アイヌの文化や生活を収められている（Дударец 2006:94)。

また、クンストカーメラ収蔵のグリゴーリエフのコレクションの中にも若干ではあるが画像資料が存在する。アイヌ絵が 6 点収蔵されている。そのうち 1 点はクンストカーメラの常設展示になっている。作者は平澤屏山の弟子のひとりであった木村巴江（巴江山人）であり、アイヌ絵の内容は熊送り・昆布採集・サケ漁・狩りといった風俗画とアイヌの男性と女性の人物画である。木村巴江が函館出身の画家であることから、グリゴーリエフが函館滞在時に購入あるいは譲り受けたと考えられる。

## 4　まとめと課題

本稿では、19 世紀後半にロシアの A.V.グリゴーリエフにより収集されたアイヌコレクションの詳細と歴史的経緯について検討した。まずは、日本滞在時にグリゴーリエフが辿った経路を復元することを試みた。そして、民族学・考古学資料、文献資料、言語資料、画像資料で構成されている彼が収集したアイヌコレクションの内容とその歴史的経緯を簡単ではあるが整理した。最後に、なぜグリゴーリエフがアイヌ調査やアイヌ資料収集を始めることにしたのかについて若干ではあるが言及し、そして今後の課題を述べて終わりにしたい。

グリゴーリエフが日本でアイヌ調査・資料収集を開始した発端は、北海道での船の座礁と

いう全くの偶然からであった。しかし、彼が集めた多種多様で豊富なアイヌコレクションをみてみると、グリゴーリエフは日本滞在以前・滞在中にアイヌに対しての一定程度の知識を得ており学問的興味を持っていた、と言うことができるであろう。ロシアにおけるグリゴーリエフとアイヌ研究の関係は、モスクワ大学教授 D.N.アヌーチンとの親交にあったようである（Дударец 2006:89）。アヌーチンはアイヌ研究により学士号を取得し、その成果を 1875 年に出版している（Анучин 1875）。グリゴーリエフは、アヌーチンとの学術的な交流により、ノルデンシェルド号航海以前に既にアイヌに関しての知識を持っていたと考えられる。また、グリゴーリエフは、東京あるいは横浜において、北方圏の先住民族を研究したノルデンシェルドや日本で民族学・考古学研究を行っていた外国人研究者と出会ったことによって、日本におけるアイヌ研究の重要性を認識・再認識した可能性がある。

グリゴーリエフのコレクションには、1877 年に E.S.モースや H.v.シーボルトが掘った大森貝塚の考古資料が含まれている。では、グリゴーリエフはどこで大森貝塚の考古資料を手に入れたのであろうか。ノルデンシェルドは、1879 年 9 月 27 日、「東京で、オーストリア公使館員 H・フォン・シーボルト氏の収集したすばらしい古代遺物の数々を鑑賞したりして過ごした」と述べている（ノルデンシェルド 1988b:318）。前述したように、この時、グリゴーリエフは函館を離れ、東京あるいは横浜にいたと考えられる。また、大森貝塚を調査したモースが 1879 年 8 月 31 日をもって東京大学教授を満期辞職して 9 月 2 日に横浜を出発し帰国しており（モース 1983:199）、グリゴーリエフとモースとが出会っていることはない。よって、ノルデンシェルドが H.v.シーボルトを訪ねた時、グリゴーリエフも同行していたと考えられ、そして、H.v.シーボルトから大森貝塚の考古学資料を譲り受けたのではないかと想定される。この時、単に考古資料を提供してもらっただけでなく、北方圏の民族学調査も行ったノルデンシェルドも交えながら、H.v.シーボルトと共にアイヌに関する民族学・考古学研究について議論したのではないかと想定される。H.v.シーボルトは、1978 年に北海道においてアイヌ調査を実施している（シーボルト 1996）。また、クンストカーメラの台帳においてグリゴーリエフがモースの著書『大森貝塚（Shell Mounds of Omori）』について記載していることから、モースの論考も当然知っていたと考えられる。これらのことから、モースと H.v.シーボルトのアイヌをめぐる「人種・民族論争」（クライナー2011:19-25、小倉 2011:76-82 など）を知っていたと考えられ、グリゴーリエフもこの議論に興味を持ち自分自身でもアイヌ研究を日本で始めてみたいと思ったのではないか。グリゴーリエフがノルデンシェルドと別れ横浜から函館へ帰ってきたその直後に、アイヌ調査の許可を函館支庁に依頼したことは偶然ではないと考えられる。グリゴーリエフは、海外研究者たちとの出会いにより、アイヌの文化や風俗習慣だけでなく当時の「人種・民族論争」にも興味を持ったと想定される。

今後の課題としては、まず、ロシア地理学協会やロシア科学アカデミー・サンクト・ペテルブルグ支部の古文書室に収蔵されているグリゴーリエフが執筆したフィールドノートや手紙などの文献資料調査を実施することが挙げられる。彼がアイヌ研究に従事した書籍・論文等は、今のところ確認されていない。日本側には彼のアイヌ調査に関する記録がほとんど残されていないため、ロシア（特にサンクト・ペテルブルグ）の各研究機関の古文書室でその記録を詳細に調べる必要がある。彼のアイヌ調査の全容を明らかにし、アイヌコレクションとの関係性を追求することが第一の課題である。次に、グリゴーリエフが持っていたアイヌに対する学問的関心とアイヌやその他の北方先住民族に関連する当時の民族学・考古学研究動向の検証が挙げられる。19 世紀後半の帝政ロシアにおける民族学・考古学研究は、体系的な研究方法を模索･構築し始めていた時期でもある。このような研究動向の変化を知りつつ、グリゴーリエフは質的・量的に充実したアイヌコレクションを意図的に収集したと考えられ

る。研究者個人の思考は、その研究者が所属しているあるいは共感している研究集団の思考に左右されると考えられる。おそらく、グレゴーリエフの思考も 19 世紀後半のサンクト・ペテルブルグやモスクワで展開されていた民族学・考古学研究の影響や、日本で出会った海外研究者の学問的影響を受けていたであろう。そのような研究集団の思考が、グリゴーリエフという研究者個人がアイヌ研究やアイヌコレクションの収集という行為を通してどのように体現されたかのかを検証することが重要と考えられる。

本稿を作成するにあたり、ロシア科学アカデミー人類学民族学博物館の A.M.ソコロフ氏とロシア科学アカデミー東洋古籍文献研究所の V.V.シェプキン氏には、御教示を得るとともに同博物館・研究所での資料見学・文献収集等で御配慮頂きました。根室市歴史と自然の資料館の猪熊樹人氏には文献収集等で御配慮頂きました。そして、加藤博文先生を始め、佐々木利和先生、谷本晃久先生、丹菊逸治先生、山崎幸治先生には日頃より懇切な御指導を受け賜わりました。また、長沼正樹、若園雄志郎、水谷裕佳の諸氏には多岐に渡る助力を頂きました。末筆ながら記して感謝致します。

**註**

1）ノルデンシェルド号が根室で座礁した時の記録に関する詳細については、城田・本田・猪熊（2007）、猪熊（2007）を参照。なお、昭和 52 年発行の国土地理院の 2,5000 分の 1 の地図には「破船場」という地名が記載されており、この名称はノルデンシェルド号座礁事件に由来する（城田・本田・猪熊 2007:30、猪熊 2007）。

2）ロシア科学アカデミー人類学民族学博物館（クンストカーメラ）収蔵のグリゴーリエフのコレクションの中に、「1879 年 10 月 22 日付のノルデンシェルドが鉛筆で書いた入れ墨を施した女性の手の線画」（Таксами 1998a:108）が存在する。しかし、この時既に、グリゴーリエフは北海道に戻っていたので、この線画をノルデンシェルドからいつどのようにして手に入れたのかについては不明である。

3）北海道立文書館蔵簿書、請求番号 3688No.54.

4）北海道立文書館蔵簿書、請求番号 3688No.62.

5）北海道立文書館蔵簿書、請求番号 3688No.73.

6）北海道立文書館蔵簿書、請求番号 3688No.79,81,82,83,8587,88,89,91,94.

7）1 ヴェルスターは約 1067m である。グリゴーリエフが行った北海道におけるアイヌ調査は、彼が船救出のために滞在していた函館付近で行われていたと考えられる。当時の日本では、外国人は許可なくして居留地から 10 里四方の外出は禁止されていたので、その範囲を超える場合、届け出が必要であった。

8）クンストカーメラの台帳を見てみると、コレクション№.「345」の遺物番号数が 60 点（遺物数 79 点）、コレクション№.「811」の遺物番号数が 29 点（遺物数 32 点）と記載されていた。アイヌ関係の資料以外も含まれていると考えられるが、SPb-アイヌプロジェクト調査団が確認できなかったアイヌ資料がまだ存在する可能性もある。

9）このリストの中でコレクション№.「345」の収集地が「サハリン」となっているが（Матвеева 1996:219）、これは間違いである。

10）現在の「アイヌ資料」の一般的な分類基準において、日本の「新石器時代」つまり「縄文時代」の考古学資料を「アイヌ資料」に分類することはないであろう。しかし、後述するように、当時の民族学・考古学研究において日本の先史時代の遺構・遺物とアイヌとの関連性が中心的議論にもなっていたことから、ここではグリゴーリエフのコレクション基準を勘案し、考古資

料を「アイヌ資料」に含める。

11）台帳には、ロシア語と英語で「Кьёккенмеддинг этот описан профессором Э. Морзем в 1-ой части 1-ой главы Memoirs of the Science Department, University of Tokio Japan "Shell Mounds of Ōmori", Tokio, 1879, 8-IV, 36 pp.+18 tab.」と記載されていた。

12）ロシア科学アカデミー東洋古籍文献研究所の V.V.シェプキン氏のご教授によると、アイヌ・蝦夷地関係の古文書・古籍に押されているロシア帝国地理学協会図書印は、目録の記載上では統一されていないが、すべて同一のものである。つまり、帝国地理学協会図書印のアイヌ・蝦夷地関係の資料は、すべてグリゴーリエフにより収集されたコレクションである。

13）アジア博物館とは、ピョートル I 世により科学アカデミーとして 1818 年 11 月に設立された研究機関である。東洋の諸言語による写本・書籍収集を主な目的としていた。1930 年に、アジア博物館はソヴィエト科学アカデミー東洋学研究所へと名所変更し組織改編された（ポポワ 2008）。

14）「ヴェガ」号で横浜へ寄港したノルデンシェルドも、日本文化に関する古文書・古籍等の文献資料を大量に買い集めていたことが知られており、そのコレクションの総数は 1036 点にも及ぶ（三木 1979:50-51）。その中でアイヌ・蝦夷関係の資料を 6 点確認することができた（Edgren 1980）。同時期に集められたノルデンシェルドによるアイヌ・蝦夷関連の文献資料数と比べると、グリゴーリエフによる文献資料が如何に目的を持って集められたかがよく分かる。

15）ロシア科学アカデミー人類学民族学博物館（クンストカーメラ）の A.M.ソコロフ氏のご教授による。

16）A.M.ソコロフ氏のご教授による。

**参考文献**

猪熊樹人
2007「記憶の一枚　根室の近現代史を追う①」　『北海道新聞』2007 年 7 月 6 日付夕刊　北海道新聞社。

荻原眞子
1998「アイヌ文化研究におけるアイヌプロジェクトの意義」　SPb-アイヌプロジェクト調査団　『ロシア科学アカデミー人類学民族学博物館所蔵アイヌ資料目録』　97-110 頁　草風館。

荻原眞子・古原敏弘・ゴルバチョーヴァ V.V.編
2007『ロシア民族学博物館所蔵アイヌ資料目録』　草風館。

小倉淳一
2011「小シーボルトと日本考古学の黎明期」　ヨーゼフ・クライナー編『小シーボルトと日本の考古・民族学の黎明』　71-97 頁　同成社。

クライナー, ヨーゼフ
2011「もう一人のシーボルト―日本考古学・民族文化起源論の学史から―」　ヨーゼフ・クライナー編『小シーボルトと日本の考古・民族学の黎明』　3-29 頁　同成社。

クライナー, ヨーゼフ編
2011『小シーボルトと日本の考古・民族学の黎明』　同成社。

小谷凱宣・荻原眞子（編）
2004『海外アイヌコレクション目録』　南山大学。

SPb-アイヌプロジェクト調査団
1998『ロシア科学アカデミー人類学民族学博物館所蔵アイヌ資料目録』　草風館。

シーボルト・H・v（訳注：原田信男・H.スパンシチ・J.クライナー）
1996『小シーボルト蝦夷見聞記』東洋文庫　平凡社。
城田貴子・本田克代・猪熊樹人
2007「明治 12 年ロシア船の遭難（1）－根室市当賀三里浜での遭難－」　『根室市歴史と自然の資料館紀要』第 21 号　27-58 頁。
ノルデンシェルド・A・E（訳：小川たかし）
1988a『ヴェガ号航海誌』（上）　フジ出版。
1988b『ヴェガ号航海誌』（下）　フジ出版。
函館新聞社
1879a『函館新聞』明治 12 年 8 月 26 日付　函館新聞社。
1879b『函館新聞』明治 12 年 9 月 11 日付　函館新聞社。
1879c『函館新聞』明治 12 年 10 月 18 日付　函館新聞社。
1879d『函館新聞』明治 12 年 11 月 4 日付　函館新聞社。
函館日ロ交流史研究会編
1998『市立函館図書館所蔵　ロシア語資料目録Ｉ』　函館日ロ交流史研究会。
長谷部一弘
1998「在サンクト・ペテルブルグアイヌ資料の研究―МАЭ 所蔵アイヌコレクションについて―」　『市立函館博物館研究紀要』第 8 号　17-48 頁。
ポポワ・I・F
2008「ロシア科学アカデミー東洋学研究所サンクト・ペテルブルク支部（SPbF IVRAN）の東洋写本コレクション」　『東京大学資料編纂所研究紀要』第 18 号　48-59 頁。
三木宮彦
1979「ノルデンショルドの本棚」　『図書』9　46-51 頁　岩波書店。
モース・E・S（編訳：近藤義郎・佐原真）
1983『大森貝塚』岩波文庫　岩波書店。
Edgren, J.S.
1980 *Catalogue of the Nordenskiöld collection of Japanese books in the Royal Library*, Stokholm.
Kabanoff, A.M
1997 On an Anonymous Manuscript *Higashi Ezo Iko*, *Manuscripta Orientalia*, Vol.3, No.1, p.48-50, SPb.
Горбачева, В.В., Карапетова, И.А.
2007 Айнские коллекции в Российском этнографическом музее,　荻原眞子・古原敏弘・ゴルバチョーヴァ V.V.編『ロシア民族学博物館所蔵アイヌ資料目録』39-82 頁　草風館。
Горегляд, В.Н.
1971 *Описание японских рукописей, ксилографов и старопечатных книг*, вып.Ⅴ,　Москва.
Горегляд, В.Н., Ханин, З.Я.
1971 *Описание японских рукописей, ксилографов и старопечатных книг*, вып.Ⅵ,　Москва.
Григорьев, А.В.
1892 Садоводство в Японии, *Вестник общества садоводства*, н.11, с.1-8, СПб.
Дударец, Г.И.
2006 Исследователь Айнов А. В. Григорьев, *Известия Института наследия Бронислава*

*Пилсудского*, н.10, с.88-101, Южно-Сахалинск.

Латышев, В.М.

1993 Айнский словарь Н. В. Рудановского,　村崎恭子編『サハリンの少数民族』255-276 頁　横浜国立大学教育学部。

Матвеева, М.Ф.

1996 Русское географическое общество и судьба его этнографических коллекций, *Курьер Петровской Кунсткамеры*, вып.4-5, с.211-223, СПб.

Ольденбург, С.Ф.

1909 Памяти А.В. Григорьева, *Журналъ Министерства народного просвещения*, с.70-76, СПб.

Петрова, О.П., Горегляд, В.Н.

1963 *Описание японских рукописей, ксилографов и старопечатных книг*, вып. Ⅰ,　Москва.

Петрова, О.П., Иванова, Г.Д., Горегляд, В.Н.

1964 *Описание японских рукописей, ксилографов и старопечатных книг*, вып. Ⅱ,　Москва.

Семенов, П.П.

1896 *История полувекового деятельности Императорского русского географического общества. 1845-1895*, часть Ⅱ-я, отдел Ⅳ, СПб.

Таксами, Ч.М.

1998a Айнские Коллекции Музея Антропологии и Этнографии Русской Академии Наук, SPb-アイヌプロジェクト調査団 『ロシア科学アカデミー人類学民族学博物館所蔵アイヌ資料目録』　107-110 頁　草風館。

1998b Собиратели айнских коллекций МАЭ РАН,　SPb-アイヌプロジェクト調査団　『ロシア科学アカデミー人類学民族学博物館所蔵アイヌ資料目録』　131-137 頁　草風館。

# The Collection History of Ainu Ethnographical Collection in Russia: The Research of the Ainu Collection of A.V. Grigor'ev

Kenji　SUZUKI
Center for Ainu and Indigenous Studies, Hokkaido University

The purpose of the paper is to examine the contents and a part of history of an Ainu collection which were collected by A.V. Grigor'ev at the time of Japanese stay for one year from 1879 to 1880: 1) Why did he stay in Japan? 2) What kinds of materials were collected by him? 3) Why did he begin research Ainu culture and collect Ainu materials?